



酒田市に拠点を置く株式会社堤自動車は、自動車の外装全般に関わる板金やカーコーティングを主軸とし、その他にも中古車販売や車両整備など、自動車関連の分野に事業展開している。堤自動車事業の根底にあるのは、代表者である堤尚史さんが「好きなこと」を仕事にできているという喜びと、より厳しい環境に身を置き、現状より一歩でも前進したいと願う、人並外れた向上心だ。

**「ひたむきな努力が育んだ圧倒的な「技術力」**  
高校卒業後すぐに自動車板金の世界へ飛び込んだ堤さんは、「10年で独立する」という明確な目標を早くから掲げていた。当時、勤務先から課されたわけではないにも関わらず、自ら毎月の施工目標を周囲の倍程度に定め、それをひたむきに達成し続けた。とにかく「数」をこなすことが自らの技術力の向上につながると考えたからだ。本業での勤務(午後5時半)を終えた後、掛け持ちする別の業者へ赴き、深夜12時まで働き続け、さらに個人的に請け負った仕事をこなすため、金曜や土曜には全く睡眠を取らないことも多かったという。この猛烈な働きぶりの原動力となったのは、体力という天賦の才だけではない。「より厳しい環境に身を置き、成長したい」と願う、彼の内なる人並外れた向上心に他ならなかった。

そして今、同業者のごとくよりも多くの施工数をこなしたこの経験値こそが、堤自動車の圧倒的な技術力の源泉となっている。これほどの努力を重ねながらも、堤さん自身は「好きなことを仕事にできているから辛いとは思わなかった」と語る。そうして自身の技術力を徹底的に鍛え上げ、26歳という若さで独立を果たした。堤自動車の強みは、このひたむきな努力によって培われた「技術力」と、一切の妥協を許さない「こだわり」に集約される。特にカーコーティングにおいては、業界内でも歴史あるブランドの正規代理店に名を連ねており、その技術力は折り紙付きだ。堤さんの信念は明確で、「お客様に喜ばれない仕事は仕事じゃない」というもの。お客様が期待するレベルを超える「一段上の仕上がり」を常に目指しており、もし仕上がりにならなければ、たとえ施工完了後であっても、「一からやり直すことを辞さない」という徹底ぶりだ。その結果、他社よりも納期が長くなり、目先の利益率が低くなったりすることもある。しかし、品質への妥協を一切許さないその姿勢こそが、結果としてリピーターの獲得に繋がり、確固たる顧客基盤を築いている。



**「経営者として「学び続ける」ということ**  
若くして独立し、現場で圧倒的なパフォーマンスを発揮してきた堤さんだが、若い頃は「現場で一生懸命働けばそれだけで経営は上手くいく」と考えていた。しかし、事業を継続する中で現実には甘くなく、経営の複雑さや難しさを痛感することとなった。そんな彼が、経営者として「学び続ける」ことの重要性を強く意識し始めたきっかけこそが、「若手経営者塾」だった。新進気鋭のバンチャー経営者から、成功を収めた熟練経営者まで、多岐に渡る講師陣の経験を生アゲしてもらうことで、感じたことがある。それは「優れた経営者は常に学び続けている」ということだ。この気づきは現在の堤さんにも継続して影響を与えており、現在は月に一度、仙台のビジネススクールに通うなど、並外れた向上心の矛先は、かつての技術習得から、より広範な経営スキルへとステップアップしている。

**新たな挑戦と「磨き」の経営哲学**

堤さんが掲げる大きな目標は、堤自動車を売上高10億円に成長させることだ。しかし、現在の従業員数と既存事業のキャパシティでは、この目標達成に限界があることを堤さんは認識している。かと言って、売上を増やすために、堤自動車の生命線である施工の「質」を落とすようなことは決してしたくない。そのため、事業構造の変革が不可欠だと考え、売上のポートフォリオ(構成比率)を見直す必要性を感じている。

特に注力しているのは、中古車を仕入れ、その車両の付加価値を最大限に高めた上で販売する車両販売事業だ。自社の核となる「磨き」の技術力を最大限に活かした事業展開であり、会社の規模拡大を実現するための重要な戦略と位置づけている。

また、目標達成のためには従業員の成長も欠かせない。堤さんは今、敢えて現場には出ないようになっている。「任せる」ことで成長を促し、より強固な現場体制を構築しようとして、マネジメントに努めているのだ。そして、単に売上を追求するだけでなく、事業「ごとの原価管理を徹底し、収益性を高めながら売上を伸ばしていく」という堅実な姿勢も持ち合わせている。この考え方は、若手経営者塾の講師、荒川昭正氏が講義で繰り返し強調する「個別単品管理」の考えに深く通じるものだ。

まるで車を一台一台丁寧に磨き上げ、新たな付加価値価値を生み出すかのように、堤さんは堤自動車そのものにも「磨き」をかけ続けている。そして、堤さん自らの人並外れた向上心を源泉として会社の未来をデザインする。そんな堤自動車の成長に今後も期待したい。

